【本願と光明】

竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。

そっと思いをめぐらしてみると、人間の考えでは思いはかることのできない阿弥陀仏の本願*は、渡りがたい生死の海を渡らせてくださる大きな船であり、何ものにもさまたげられない阿弥陀仏の光明*は、真理に暗い私たちの闇を破ってくださる恵みの太陽である。

浄土真宗の成立根拠は、『仏説無量寿経』（大経、大無量寿経）に説かれる「阿弥陀仏の本願と光明」にあります。そのことを親鸞聖人は『教行信証』の冒頭で伝えてくださっています。苦悩を生きる私たちは、阿弥陀仏の本願と光明によって救われていく（＝仏道を歩むことができる）のです。

＊阿弥陀仏の本願　すべての衆生を救おうとする阿弥陀仏の願い。『仏説無量寿経』では、四十八個の願として説かれている。この四十八願は、「このような阿弥陀仏となりたい」、「このような浄土をつくりたい」、「このように衆生を救いたい」の三つに大きく分類される。

＊阿弥陀仏の光明　四十八願のうち、十二番目の「光明無量の願」が成就した光。衆生がどこにいても必ず照らし出すという阿弥陀仏のはたらきのこと。

【王舎城の悲劇の意味】

しかればすなわち、浄邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。

そのような阿弥陀仏の本願と光明による救いが完成しているので、その浄土という世界が開かれる機縁が熟し、提婆達多*は阿闍世*をそそのかし、父の頻婆娑羅王を死にいたらしめるという、反逆の罪をおこさせた（王舎城*の悲劇）。浄土に生まれる行業（念仏）を修めるにふさわしい人物（韋提希夫人*）があらわれて、釈尊は、夫人が、阿弥陀仏の浄土を願うべきところとして選ぶようにおはからいになった。

親鸞聖人は、『仏説観無量寿経』（観経、観無量寿経）に説かれる「王舎城の悲劇」を、過去の一事件としてではなく、浄土の教え（お念仏の教え）が説かれる機縁（きっかけ）となった出来事として、とらえています。

＊提婆達多　釈尊のいとこ。仏弟子となったが、やがて釈尊をねたみ、釈尊にかわって教団のリーダーになろうとしたが失敗した。

＊阿闍世　古代インドのマガダ国の王子。父は頻婆娑羅、母は韋提希。

＊王舎城　マガダ国の首都。釈尊が説法をした地のひとつ。

＊韋提希　マガダ国の后。阿闍世の母。阿闍世に幽閉され、後に釈尊から浄土の教えをうけ、救われる。

【菩薩方と仏のいつくしみ】

これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。

これは、菩薩方が仁の心から、王舎城の人々のすがたをとって、苦しみ悩むすべての者をひとしく救おうとされ、また仏が慈悲の心から、五逆・謗法の者、そして一闡提に真実の法を恵もうと思われたのである。

親鸞聖人は、韋提希夫人等の王舎城の人々を「権化」、すなわち苦悩する人々を仏道に導くために「仮のすがたをとってあらわれた菩薩」と仰いでいます。その一方で、韋提希夫人を「凡夫（煩悩にみちあふれた者）」と見定めてもいます。つまり親鸞聖人にとって韋提希夫人は「権化」であり「凡夫」でもあったのです。これは韋提希夫人に対して、どこまでも自分と同じ凡夫のすがたとともに、その自分を仏道に立たせてくれた恩徳を通して、人々を救う菩薩のすがたを見出されているのでしょう。

＊五逆　父を殺す、母を殺す、聖者を殺す、仏のからだを傷つける、教団を分裂させる、の五つ。仏教における五つの重罪。

＊謗法　仏法をそしること。五逆と同じく重罪とされる。

＊一闡提　仏になることができない者。